

「受洗タタール」から「クリャシェン」へ ——ポスト・ソ連期ロシアにおける「民族復興」の様態——

桜 間 瑛

ソ連崩壊以降、旧ソ連圏内の至る所で、「民族復興」や「民族紛争」というものが持ち上がっている。しかし、そこで語られている「民族」とは一体いかなるものなのか。すでに、「民族」とは、「創られた伝統」に支えられ、「想像」の中に存在するものである、という理解が広まって久しい。しかし、ではその「創造」「想像」はいかなるスタイルで行われているのか、という点に関しては個別に議論する余地が大いにある。本報告は、現在のロシアにおける「民族運動」のケーススタディとして、その「民族」なるものがいかにして語られ、正当化されているのかということを検討することを目的としている。

ここで検討の対象としたのは、沿ヴォルガ中流域を中心に居住している「クリャシェン *kriasheny*」と呼ばれる人々である。これは、「受洗タタール (*kreshchenye tatory*)」とも呼ばれる集団で、16世紀半ばのガザン征服以降の改宗政策の結果、正教徒となった人々の子孫として知られている。

20世紀の初め頃から、その中の知識人層を中心に、周囲のタタールと異なる存在としての「クリャシェン」を自称する人々が現れた。そして、革命前後の時期にはその名を冠した「民族」としての地位を享受した。しかし、諸民族の「接近」と「融合」が進められる中で、「タタール」の中に包摂されていくこととなる。1926年の全ソ国勢調査においては、辛うじて民族欄にその名を残したものの、以降はその地位も失ってしまった。

その後、ペレストロイカを迎え、様々な民族がその文化の復興を目指すようになると、「クリャシェン」もその「民族」の地位と文化の復活を掲げて活動を開始する。当初はタタールの運動の一部をなしたものの、ムスリムを中心とするタタールの活動の中で、次第に孤立を見せていく。そして、その位置づけを巡ってついに分裂し、2002年の国勢調査前をピークにして、タタール民族主義者との間に論争を繰り広げることになった。

ここで注目すべきなのは、「クリャシェン」を主張する人々がいかなる根拠をもって、自身が「民族」であることを主張しているか、ということである。そこで、その言説を見てみると、まず特徴として挙げられるのは、自分たちの「民族」の起源を、古い時代に求めよう

とする点である。すなわち、「クリヤシエン」を帝政期の改宗政策の結果生まれた集団とする説に反対し、この地域に古代に居住していたキリスト教徒の集団を挙げながら、それを自身の祖先と同定している。

また、言語や習慣、さらには身体的形質などにおいて、「クリヤシエン」と「タタール」の間には、差異があるということも強調する。特に言語の相違は最も議論を激しくする問題となり、クリヤシエンが母語とする言語を「独立した言語」とするのか、「タタール語の方言」とみなすべきか、という点が大きな論点になっている。

もう一つ大きな争点となったのが、「クリヤシエン」とは第一義的に宗教を自身の特徴とする集団であるのか否か、という点であった。すなわち、多くのクリヤシエン活動家たちは「クリヤシエン」を「宗教的な集団」と定義することに対し、強い反発を示しているのである。そして、「クリヤシエン」に含まれる人々の中には、キリスト教徒でない人々も多く含まれているとして、単なる「宗教的集団」ではない、と強調している。実際に、「クリヤシエン」という地位を求めて積極的に活動している人々の多くは、自身を「無神論者」としており、教会での礼拝などにも積極的には参加していない。

もっとも、「クリヤシエン」を主張する人々のすべてが、そうした非=宗教性を一貫して主張しているわけでもない。正教徒である、ということを前面に押し出しつつ、それゆえの独自性を主張する人物も確認できる。また非=宗教性を強調している人々の主張も、その詳細を見てみると、結局「正教徒」ということがその最も顕著な指標となっている面が垣間見られる。さらに、その発言を仔細に眺めたときに、一方では「タタール」との差異をしきりに強調している人々が、時にタタールに対する近親感のようなものを感じさせる言葉を発していることに気づく。

本報告は、こうした一見混乱し、ねじれた諸言説を基に、「クリヤシエン」が「民族」を名乗るメカニズムとその論理を指摘した。そもそも、クリヤシエンがその復興を主張した背景には、タタールの間の民族・宗教復興という流れが存在した。その中で正教徒集団として、ムスリムを中心とした活動に囲まれ曖昧な位置に立った人々が、その葛藤を解決すべく乗り出した運動が、このタタールとは独立した存在としての「クリヤシエン」を主張する運動であったといえる。そして、ここで示した言説の分析から、それがなぜ「民族」という形式をとることになったのが明らかとなる。実は彼らが「民族」の正当化に用いる論理は、ソ連が提示したそれと見事に一致している。ソ連時代には、宗教的な分類が否定された一方で、言語やその地に古代から残る「民族文化」、身体的形質などに基づく「民族」というものが基本的な分節の単位とされ、パスポートにも記載されていた。それを内面化していた運動の中心をなすクリヤシエン知識人たちは、まさにその形式に則って、独立した「民族」を

語り、その運動を展開している、ということを本報告は指摘した。

これは、ソ連崩壊以降の「民族」の「創造」と「想像」の一つのパターンとして提示できよう。ペレストロイカ以降の潮流の中で、タタールのような基幹民族は積極的にその文化の復興などを目指して活動を行った。しかし、他方ではその内部において、小集団間の差異が露になることとなった。そうした小集団の中で、孤立を見せるようになった人々の中には、独立した「民族」を名乗るような動きも出てくる。しかし、そうした運動を牽引する知識人たちは、それを乗り越えようとしたはずの、ソ連において形成された「民族」概念を内面化しており、まさにそれに倣った形で自身の主張・運動を形成している、という逆説的な現実のあることを、本報告において指摘した。

(北海道大学文学研究科博士後期課程)